

志水仁兵衛（初代甚五）は禅芸術

「梟図」鐔、「放れ牛図」鐔

伊藤 三平

はじめに

肥後の志水仁兵衛（？～延宝3（1675）年、初代甚五）の作品は観る人に強烈な印象を与える。私は仁兵衛の作品に強く惹かれ、長きに渡って愛蔵してきたが、仁兵衛の作品が禅芸術であると気が付いたのは近年である。先人の中には「甚五は極めて禅的であり、白隠禅士の墨跡に相通じる巨人的・超人間的なところがある」（『透鐔 武士道の美』笹野大行著）と記している人はいるが、本格的に論じている人はいない。以下に私が感じ、考えてきたことを述べてみたい。

（注）従来は初代甚五とされていたが、『平田・志水』（伊藤満著）で①志水家に伝わる藩に提出の「先祖附」（控）の文書と、②医王寺の寛文12（1672）年紀の庚申塔に初代は仁兵衛尉一幸と銘が刻まれているとの調査結果から、当論では仁兵衛を使う。

1. 「放れ牛図」（騎牛帰家）鐔

「放れ牛図」鐔の法量（mm）は縦69・0、横68・0、耳厚3・0、切羽台厚4・2で、耳の形状は、丸耳に近い角耳小肉である。この図は禅の画題である「騎牛帰家図」の留守模様（主人公である人物を表現せずに、その人物の特徴的な持ち物で画題を連想させる）として、笛が裏面右下に銀象嵌されている。

騎牛帰家図の本来の絵は、牛の背に乗って、笛を吹きながら家路に向かう人物が描かれている。



2. 騎牛帰家とは

「騎牛帰家」とは、禅の画題「十牛図」の中の1枚で6番目の境地を描いた図である。中国北宋時代の禅僧廓庵師遠が禅の修行には十の段階があるとして、それぞれの段階ごとに寓意の絵を画いたものである。各段階を説明していくが、禅の解釈であり、説く人によって小異があることをお断りしておきたい。牛を本来の自分Ⅱ悟った自分Ⅱ幸せの境地の象徴として、①尋牛（幸せになるためには、待っていてはダメで自分から牛Ⅱ幸せを尋ね、探すこと）、②見跡（やっと幸せへの道Ⅱ牛の足跡を見つける。それはお経や先人の言行である）、③見牛（木の陰に牛の半身を見つくる。お経や師の言葉から、おぼろげながら仏教Ⅱ幸せの一端に触れ、少し知った段階）、④得牛（牛Ⅱ幸せの鼻に手綱をかけ、自分の手で掴むが、牛は嫌がって逃げようとするので、離すまいと努力する）、⑤牧牛（牛が慣れて、飼育でたⅡ幸せが心の中に入りこんだ。ただし、心の中から逃がさないようにしている段階）、⑥騎牛帰家（牛も手慣れ、幸せが心の中に定着した。心の中も平穩。無事泰平の心となり、自由に繰れるようになった牛と一体になって笛を吹きながら家に帰っていく心境）、⑦忘牛存人（家に帰って、あれほど求めていた牛のことすら忘れた心境。牛と自分が

一体になったが、実は牛Ⅱ幸せは外にあるのではなく自分の内にあるものであるということを知った段階）、⑧人牛俱忘（幸せになることも、不幸せになることもこだわらず、全てを受け入れる段階）、⑨返本還源（幸せを求めて旅に出て、求めつくして自分のものにし、それすら忘れる世界に帰る段階）、⑩入麁垂手（「てん」は汚染した俗界のことで、垂手とは手を垂れることであり、汚れた世界に自ら飛び込んでいつて自分以外の人々を助け導く最高の境地）の十段階である。

相国寺には室町時代前期の禅僧絶海中津や、室町時代中期の周文の十牛図が残されている。鐺の画題にも取り上げられ、伏見住金家にも騎牛帰家図が存在する。

3. 「梟図」鐺

この「梟図」鐺も「騎牛帰家図」鐺と大差の無い大きさで、鐺の法量（mm）は縦68・9、横67・4、耳厚4・2、切羽台厚4・7である。裏は円形の「松葉」を2つだけ、銀で平象嵌しているだけである。

ちなみに仁兵衛には梟と止まり木の松を真鍮象嵌した鐺なども複数現存している。

この図が何で禅の画題かと疑問に思われる人も多いと思われるので、章を改めて説明したい。



4. 江戸時代初期の梟図絵画

梟図として、狩野山雪（天正18（1590）～慶安4（1651）年）の「梟鶏図」（根津美術館蔵、画像は同美術館の「対」で見る絵画展）を「婦人画報」のHPで紹介したのから採用、部分である）の絵を紹介したい。この絵は一説に狂言（笑い、ユーモアの伝統芸能）の「梟山伏」（にわとりむこ）と「鶏智」を意識して描かれたとも言われているがそうではないと考える。

山雪にはもう一幅、同様の「松に小禽・梟図」があり、その絵の賛（その絵に關した詩歌・文章を画面の中に記したもの）を建仁寺第三百二世の釣天永洪（対馬の以酩庵で朝鮮外交僧としても活躍）が記しているが、その内容は「梟は、不孝、悪声とされ鳥の仲間から孤立してきたが、見方を変えれば、どうして梟が悪いのか。人の印象など実体のないものだ」と言う内容のことである（画像も引用文も『へそまがり日本美術』（府中市美術館編・著より））。



私はこの梟図は、禅語の一つ「帰家穩坐」(長い旅を終えて、わが家に帰り安らかに坐する如く、久しい修行の末に悟りの境地を得て安穩であること、すなわち騎牛帰家と同意)を表現したのではないかと考えている。

鶏に関しては、東京国立博物館に「竹鶏図」(重要文化財・広島藩浅野家旧蔵)があり、同館HPの「館蔵品一覧」によると、作者の蘿窓は南宋の禅僧で、牧谿と並ぶと評価されており、この絵の自賛(作者による賛)には、五更(午前四時)の未明に竹下に潜み、鋭い目付きであたりを睥睨する鶏は、文、武、勇、仁、信の五徳を備える悟りを得た高僧のようだとある。

ちなみに志水仁兵衛は「鶏図鐔」もいくつか製作しており、これらも禅に関する画題ではなからうか。(画像は『肥後金工大鑑』より、黒川古文化研究所蔵)



5. 禅とは、禅の美術とは

禅は神様・仏様を信じて願い・頼むという宗教ではなく、人間に本来備わっている仏のような心を坐禅や師との公案を介した問答を通して自分を見つめることで自覚しようとする宗教である。坐禅や問答の修行体験を通して、ある瞬間に忽然と悟る頓悟が重要視される。修行の過程で師との問答は大切なものだが、「禅問答」の言葉が本来の意味から転じて「ちぐはぐでわかりにくい問答」という語意を持つように、頓悟という経験を持たない私を含めた世人が禅を正しく理解するのは難しい。また、一切の邪念・妄念を離れた無心の状態が重視されるので、茶道、能や武道などとも相通じるところがあり「剣禅一如」(沢庵和尚の言)の言葉も知られている。

禅と芸術の関係だが、鎌倉時代から室町時代には禅宗を母体とする水墨画が盛んになる。画才に秀でた禅僧(如拙、周文、雪舟、雪村)が師の肖像画(頂相)や、禅の開祖の達磨や、公案に因む画題を画き、また山水画、風景画を残している。室町芸術の大きな流れの禅芸術が刀装具の世界にも影響を与えているのは当然と考えられる。同時に志水仁兵衛の作品の全てが禅に関係していると言うのも雪舟の画題の幅を見ても違うと思う。

禅寺の庭園には枯山水と称される石庭があり、その印象に影響を受け過ぎているとも思えるが、久松真一(哲学者・仏教学者)は禅芸術の特質として「不均斉、簡素、枯高、自然、幽玄、脱俗、静寂」(『禅と美術』より)の7つの要素を指摘している。龍安寺の石庭は、案内書には見所や意味が記されているが、拝観する人がそれぞれに思いを巡らすことで良いのではと思う。時代や芸術の種類は異なるが、ピカソが「ゲルニカ」の絵の解釈について「鑑賞者は観たいように観ればいいのだ」と突き放したのと同様だ。

私は、この志水仁兵衛の「梟図」鐔の梟の目を観るたびに「もっとよく観ろ、見方が浅い」と叱咤されるように感じ、「放れ牛図」鐔で牛の顔を観るたびに「孤高を恐れるな、自分の信じた道を歩め」と励まされているように感じる。帰家穩坐(騎牛帰家)とは違った解釈だと思うが、こういう見方が許されるのが禅芸術なのだと思う。